



今年度、初めてヴィオラ奏者を江副記念財団の奨学生としてお迎えしました。ヴァイオリンやチェロに比べるとまだ少し存在感が薄いヴィオラについてお聞きしたく、またヴィオラの魅力をおおいに語って欲しいと思い、Q&Aをお願いしました。田原さんの回答を読んでいると、田原さんのヴィオラを愛する気持ち、ヴィオラを皆さんに知ってほしい、という気持ちが溢れています。是非ご一読ください♪

**Q1. 今年度、初めてヴィオラ奏者の方を奨学生にお迎えすることができました。まずは、田原さんの思うヴィオラの魅力を語っていただきたいと思います。**

A1. 今年度から江副記念財団さまにヴィオラ部門を新設頂けたこと、そしてそれだけでなくご支援まで頂き心から感謝しております。本当にありがとうございます。

ヴィオラという楽器は、温かくて深い音色、そして人の心の琴線に触れるような表現力を持つ楽器で、私は初めてヴィオラと出会った時に「この楽器と一生歩んでいきたい」と強く決心しました。

ソロだけでなく、室内楽というフィールドでも必要不可欠な存在で、主に「内なる声」である内声を務め、音楽そのものに奥行きを与えるという大切な役割を担う素敵な楽器です。

また、ヴィオラ自体に大きさや形に決まった寸法というものがなく、それによって同じ音色を持つ楽器がひとつとしてありません。そんな個性豊かな味を生まれ持っている楽器に、ヴィオリストそれぞれの独自の世界観が掛け合わさるところも魅力のひとつだと思っています。



**Q2. 今回のブルッフによる「クラリネットとヴィオラのための二重協奏曲」を聴いていて、田原さん自身がクラリネット奏者やオーケストラの方々と共に最高の音楽を作りだそうとすることに喜びを感じ、楽しそうに演奏をしていらっしゃるように感じました。その喜びが聴き手にも伝わり、聴き手も幸せな気持ちになった気がします。田原さんはいつも何を思い、聴衆に何を伝えたいと思って演奏されていますか。**

A2. ブルッフのクラリネットとのドッペル協奏曲は演奏される機会も少なく、今回初めて取り組んだのですが、本当に美しくロマンティックな作品で、勉強すればするほど大好きになりました。

いつも本番では、自分自身の全精力を注いで、作品と真摯に向き合い、沸き起こってくる作品への深い愛情と作曲家へのリスペクトの気持ちを心から込めて演奏するようにしています。

今回のように他の楽器とのアンサンブルもある場合は、相手の演奏者に心からの信頼を置いた上で、楽器や演奏者同士の様々な化学反応で起こる音楽的な対話や聴いて下さっているお客さまの反応や息遣い、呼吸も楽しみながら、音楽という素晴らしい芸術の時間を共有できる喜びを感じています。

沢山の方に支えられて舞台に立たせて頂けていることに感謝しつつ、何よりも「この作品が好きだ！」という想いとヴィオラという楽器の素晴らしさをお客さまに伝えたいと常に強く思っています。

**Q3. この春から楽器が変わったそうですが、今使用しているのはサントリー芸術財団さんより貸与された PAOLO ANTONIO TESTORE とのこと。以前の楽器とはどのように異なるのでしょうか。**

A3. 以前使っていたものは、ベルギーで作られたもので、太くて厚みがありながらも柔らかさもある音色を気に入り、ずっと演奏されず眠っていたものを精一杯大切に弾き込んできました。見かけも焦げ茶色でふっくらとしており、ちょっとゴツゴツさもあるユニークな形をしています。

今お借りしている楽器はイタリアで製作されたこともあり、華やかで強いキャラクター、艶やかな音色が魅力的です。楽器の形もスタイリッシュでスマート、色も美しい黄金色で、風格も感じさせる顔つきをしています。

2つの楽器は同年代に製作されたものですが、見かけも音色も正反対の個性を持っていて、弾く度に多くのことを楽器から学んでいます。

楽器と弾き手の関係は、人間関係と全く同じで、第一印象はあるものの、そこからまたじっくりと時間をかけて分かりあっていく必要があるように思います。今の楽器も弾き始めてから約半年が経って、少しずつですが私もこの楽器に馴染んできたように感じており、今後もさらに楽器と仲良くなれるように今後も真摯に向き合っていきたいです。

また、どちらも魅力的で大好きな楽器なので、個性の異なる2つの楽器を曲目や演奏スタイルによっていつか弾き分けることが出来たら更に面白いかなと考えたりもしています。



(ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、コントラバス。インターネットより)



(江戸川区総合文化センター様よりご提供)

**Q4. パリ・エコールノルマル音楽院での勉強が来年6月で3年を迎え、修了予定とのことですが、この2年半とても充実された日々を送り、間違いなく大きな収穫があったと思います。何を得て、どのようにご自分が変わったと思われますか。**

A4. 何より精神面で大きな変化がありました。日本にいた3年前よりもずっと音楽やヴィオラとの距離感が近くなり、更に音楽と心から寄り添えるようになったと思っています。

異国での国際コンクールに挑戦したり、音楽祭に参加した経験はひたすらに自身との闘いでした。そのため家族や友人達に支えられ、守られながら日本で勉強してきた以前の自分よりもずっと強く、たくましくなれたように思っています。

また、パリで悠々自適に生活する人々を見ると、時間や目の前のことばかり囚われないで、自分の中に流れるフィーリングや、焦らずに腰を落ち着けて物事を考える時間がどれだけ大切かということを感じます。

もともと周りに流される性格ではないのですが、留学してより自分のペースを大事に勉強するようになりました。何よりヴィオリストとしても人間的にも尊敬するパスキエ先生から学ぶことが数え切れず、スケールの大きな音楽作りと音色のパレットを増やすことを以前よりも考え、取り組むようになったと思います。

Q5. 田原さんの言葉の端々にヴィオラに対する深い愛情とヴィオラの素晴らしさを人々に知ってほしい、という思いが伝わってきます。

今日の演奏をお聴きしてヴィオラの温かく深みのある音色、自然と心に染み入るようなふくよかな音色にとっても惹かれました。そういう聴き手を一人でも増やしてほしいと思いますが、ヴィオラの魅力を伝えるために具体的にどのように取り組んでいきたいとお考えですか。

A5. ヴィオラの魅力を知って頂くためには、まずは生の音を聴いて頂かないことには何も始まりません。なので、沢山の方に聴いて頂くために、足を運びやすい無料のロビーコンサートや他にも共演者のいる室内楽公演、じっくり楽しんで頂くためのソロサイタルと、あまり考え方に縛られずに幅広い活動を行うようにしています。

そしてヴィオラという楽器の存在を知って貰い、「ヴィオラってこんな素敵な楽器なんだ」と一人でも多くの方に感じて頂けるよう、ひとつひとつの本番を大切に、常に心を込めて演奏するというを何よりも心がけていきたいです。

また、ヴィオラの魅力を一番伝えやすい曲目というのはやはり「ヴィオラの為に作られた」オリジナル作品だと思います。しかしヴァイオリンやチェロに比べるとヴィオラのオリジナル作品は圧倒的に数が少ないので、ヴィオラという楽器の為に沢山曲を作って貰えるよう、とにかく自分自身を磨いて努力していきたいとも考えています。



(江戸川区総合文化センター様よりご提供)

Q6. ヨーロッパでは既にヴィオラの地位が確立されているそうですが、なぜ日本ではそういう意味ではまだこれからなのでしょうか。ヴィオラの演奏を披露されて、ヨーロッパと日本の聴衆の反応はどのように異なっていると思われますか。

A6. ヴィオラに出逢ってからまだ日が浅いので、あまり偉そうなことは言えないのですが、やはり日本ではヴィオラに対して少し珍しいという感覚があるように感じます。

ヴァイオリンは知っているもヴィオラは知らないという日本人は多いのでは...と思うのです。ヨーロッパではヴィオラを若い頃から学び始め、そのままヴィオリストになる傾向もあつたりして、ヴィオラを弾くことに皆高い誇りを持っているのが伝わってきます。

良い音楽、素晴らしい演奏というのは楽器に関係ありませんが、それでももっとヴィオラがヴァイオリンやチェロのように日本で自然に人の生活の中に溶け込み、さらに活性化してほしい、そのために私もコツコツと活動をしていきたいです。

Q7. 財団の器楽部門の奨学生のみなさんに同じ質問をお聞きしています。田原さんが一番幸せだなあと思う時はどんな時ですか。自分を一番元気づけてくれるモノ(人、食べ物等)は何ですか。

A7. とにかく今は音楽が一番大好きで、どんなに落ち込んだり辛い時も最終的には音楽からパワーを貰い、救ってもらっていると思います。特に室内楽で仲間たちや素晴らしい音楽家たちとひとつの音楽を作り上げることが何よりも楽しくて充実感を感じ、いつも幸せな気持ちで満たされます。

私を元気づけてくれるのは何よりも「音楽仲間」であり「音楽そのもの」ということです！

音楽以外となると、とりたてて特別な趣味がないのですが、夜中に仲の良い友人達と長電話をしたり、本屋さんで物色した沢山の本を、パリのTGV等での長い移動時間で移り変わっていく景色を味わいつつ、のんびり読んだりするのも至福のひとつとなっています。

とても丁寧に答えて下さった田原さんの回答によって、ヴィオラのことをたくさん知ることができました。また、室内楽でもヴィオラの音を追ってみたり、他の楽器との語り合いに耳を澄ませてみたり、楽しみ方も広がった気がします。田原さんの演奏活動は、間違いなくヴィオラファンを広げています。

初めてヴィオラと出会った時に「この楽器と一生歩んでいきたい」と強く決心したという田原さん。いつも明るく、素敵な笑顔の田原さんですが、芯は強く、自分の信じるところを突き進む、秘めた強さも感じます。

自分を元気づけるものは「音楽そのもの」。音楽がある限りどんなことがあっても、田原さんは前に進み続けることができるでしょう。これからもますますヴィオラを愛し、音楽を愛し、ヴィオラファンを広げてください。そんな田原さんを追いかけて、応援したいと思います。



(ヴァイオリンのソリスト、第43回生の山根一仁さんと)



(ピアノのソリスト、小林愛実さん)



(指揮者の田中祐子氏)